

中国人留学生の研究観の形成とその変容過程  
—大学院修士課程入学前から修了後まで—

胡 芸群

【博士論文要旨】

1. 研究目的および問題意識

本研究の目的は、日本語専攻生がどのような研究観に基づいて日本の大学院への進学を希望・準備するのか、また、大学院入学後、修士課程で取り組む研究諸活動の中で、その研究観が何によって、どのように変容していくのかを明らかにすることにある。

こうした研究目的に関心を持つようになったきっかけは、ある日本語学校で大学院進学クラスを筆者が担当したことにある。そのクラスの学習者が大学院の教員宛に書いたメールの内容を添削していくうちに、中国人日本語学習者が書いたメールは、大学時代の成績やこれまで履修してきた授業科目など、自分をアピールする内容ばかりであり、なぜ大学院に行きたいか、どんな課題を研究したいか、どんな文献を読んできたかという研究に関わることについては、ほとんど書かれていないということに疑問を感じるようになった。

大学院進学のための指導をしていると、学習者から「日本語力を高めたい」「修士の学位がほしい」などの理由で大学院へ進学したいという声を耳にする。研究したい課題について聞くと、「よくわからない」、「先生の指導に従う」のような受け身の態度が見られる。これまで大学院に進学・修了した元・中国人日本語学習者からは、入学当初、ぼんやりとしていた大学院のイメージや研究への認識が、大学院生活の深まりと共にはっきりとしたものへと変化していくという声が聴かれる。こうしたイメージや認識の変化は何によって、どのように生じたのだろうか。

筆者自身が大学院で学んだ経験を振り返ってみると、おそらく2年間にわたり取り組んできた研究活動の影響が大きい。このような、中国人留学生の研究に対する認識の変化が、筆者には興味深く感じられた。そして、何によって、どのように認識の変容が起きるのかについて、研究活動との関わりの中で深く探ってみたいと考えようになった。

2. 先行研究

第2章では、大学・大学院における留学生の生活面・言語面・学習（研究）面から先行研究を概観した。

生活面において、留学生は先輩や教員などとの人間関係やコミュニケーションの問題、研究面での不安や戸惑い、住居や学費などの経済的な困難などの問題を抱えていることが先行研究で明らかにされていた。

言語面については、アカデミック・ジャパニーズ（以下、AJ とする）の定義を整理した後、AJ の使用実態や留学生のニーズ、AJ 教育に関する実践研究について概観した。AJ 教育ではさまざまな実践活動がなされているが、その中でも研究活動に着

目したものでは、研究計画書の作成や論文の書き方に関する授業内容が、留学生に肯定的に評価されていた。

大学・大学院を実践コミュニティとして捉えた研究面については、理工系と人文社会科学系分野に分け、学術的コミュニティの参加について概観した。その結果、高度な専門知識や日本語力は勿論、研究室のルールや実験装置などの人工物との相互作用が、十全的参加の支えとなっている一方で、正統的にコミュニティ参加の機会が与えられないことや、他者との関係性などが原因でコミュニティ参加の失敗を引き起こすことがある、ということが明らかになった。また、研究意識や態度に着目した研究では、授業の活動を通し、研究に対する捉え方や姿勢の変容が見られた。しかし、大学院で研究活動に取り組むなかでの研究意識の形成や変容などを縦断的に分析している研究は管見の限り見当たらない。大学院で学ぶ留学生がどのように研究活動に参加し、その過程において、どのような研究意識が形成されているかを明らかにすることによって、取り組むべき課題に関する情報提供ができるとともに、学習環境の整備を通して、これから大学院で研究しようとする留学生への支援に貢献できると考える。

### 3. 論文の構成と成果

本研究の分析は、大きく 6 つに分かれる。「研究生になりたい」というメールに対する読み手の意識（第 3 章）、大学院進学を目指す中国人日本語学習者の研究意識の特徴（第 4 章）、大学院を修了した中国人留学生の研究意識の特徴（第 5 章）、研究活動を通して得られた気づきと学び（第 6 章）、大学院に在籍する中国人留学生の研究観の形成およびその変容（第 7 章）と修士論文を書き上げるまでの研究活動の過程および意識の変容（第 8 章）の 6 つである。各章の概要と研究成果を以下に述べる。

第 3 章では、大学院の教員、日本語教師、留学生、日本語学習者、計 75 名の調査協力者を対象に、大学院の教員宛に書いた「研究生になりたい」というメールに対する読み手の意識について、質問紙調査を実施した。分析の結果、「日本語の正確さ」、「読み手への配慮」、「書き手の背景」については、評価者グループごとに重視度が異なっていたが、「研究理解・研究能力」に対しては、いずれの評価者グループも重視度が高いことが明らかになった。その背景には、大学院における学びや研究に対する意識が影響していることも示唆された。

第 4 章では、大学院進学をめざす中国人日本語学習者の研究意識に焦点を当て、PAC（Personal Attitude Construct）分析によるインタビュー調査を実施し、その特徴を明らかにした。その結果、日本語学習者に共通して見られたのは、大学院において高い日本語力、特に会話力を重視していること、また、日本社会や日本文化をより深く理解し、日本語力の向上だけでなく、視野の広がり期待していることが確認された。研究に関しては、研究活動の流れを認識できていることや、研究課題の選定を興味・関心だけでなく、自分の学習経験や母語との違いから設定しようとしていることが明らかになった。また、他者との交流も重要視しているが、その多くは、日本語力の向上、語彙の習得など知識の獲得を期待しているためであり、自分の研究にどのように役立つのか、研究との関連性を見出せていないことが明らかになった。

第5章は、大学院を修了した中国人留学生の研究意識の特徴に焦点を当て、日本語学習者との比較を行った。PAC分析の結果、留学生に共通して見られたものは、努力の持続と能動的に取り組む姿勢である。また、大学院における研究は一人で行うものではなく、ゼミなどで自分の研究を発信したり、他者との対話を通して自己の力不足を認識したり、多角的な視点を得たりしながら行うものであるということも重視されていた。ゼミでの議論や指導教員からの質問をきっかけに、研究のオリジナリティの重要性、意義を考えるなど、メタ的に研究を捉える意識も芽生えていた。

第4章で取り上げた日本語学習者との共通点として、他者との交流が重視され、研究に対する努力や能動的に取り組む姿勢が必要であるという意識が挙げられる。相違点として、日本語学習者は大学院では何かを学び、スキルを高めようとする学習意識が多く見られたのに対し、大学院を修了した留学生は、先行研究の重要性や研究に対するメタ視点の獲得などが意識されていた。

第6章では、博士課程へ進学した中国人留学生に焦点をあて、PAC分析を用い、研究活動を通して得られた気づきや学び、また、自己の成長について分析・考察を行った。その結果、研究をする上で、周囲からいろいろな意見や批判的なコメントを受けることにより、傷ついたり、苦痛を感じたりしていたが、自分の弱点を意識したり、新たな気づきが得られたり、研究に対する認識をより具体化・精緻化できたことが窺えた。

第7章では、大学院で学ぶ中国人留学生を対象に、修士課程2年間における研究観の変容、およびその要因について分析した。6回のPAC分析を行った結果、大学院に入学した当初では、研究の手法や流れなど形式面に焦点が当てられ、研究に対して漠然としたイメージを抱いていたが、主体的に研究に取り組むなかで、研究を分析的・メタ的な視点で捉えるようになっていた。また、置かれている環境やゼミ、講義で受けた刺激によって、調査期間中に長期的に保持された研究観、一度消えた後再度現れる研究観、そして、一時的にのみ現れ最後には出現しなくなる研究観があることが明らかになった。

第8章では、前章と同じ調査協力者を対象に、修士論文を書き上げるまでの研究活動の参加過程をTEM(複線経路・等至性モデル)図によって可視化した。また、TLMG(発生の三層モデル)を用い、時間的過程の中での意識の変容についても分析を行った。その結果、論文を書き上げるまでのプロセスは、「第Ⅰ期：テーマを探し始めてから研究方法が決まるまで」、「第Ⅱ期：質問紙の作成からデータ収集まで」、「第Ⅲ期：データ分析を始めてから修士論文を書き上げるまで」の3期に区分することができた。「論文を書き上げる」という等至点に至るまでのプロセスにおいて、「テーマを絞る」「研究方法を選定する」「調査対象を選定する」「質問紙を作成する」「調査の人数を決める」「協力者を探す」「分析方法を考える」「論文をまとめる」という8つの分岐点(BFP)が見出された。また、経路選択において、「研究環境要因」「他者との対話による要因」「周囲の支援による要因」の3つの要因が、促進要因かつ阻害要因として働いていることが明らかになった。本研究の結果から、論文作成のプロセスにおいて何らかの迷いや困難が生じる分岐点に着目した上で、大学院の先輩や先生による細

やかな支援をしていく必要があることが示唆された。

以上の結果を踏まえ、大学院予備教育および大学院における研究活動への取り組みについて2つの提案をした。

まず、大学院予備教育に、研究活動の疑似体験活動を取り入れる必要があるということである。具体的には次の3つの提案を述べた。(1) 進学希望先の大学院の状況や背景を知った上で、専門の研究について討論したり、取り組んだりすること、(2) 大学院留学生をゲストとして招いたり研究室を見学するなどして、大学院との接点をもつこと、(3) 大学院で行う研究活動の意味について話し合う時間を設けること、である。以上のように、大学院予備教育は、言語知識やスキルの習得だけでなく、学習者の専門に関連する一連の研究活動を体系的に支援する活動を取り入れていく必要がある。

2つ目の提案として、大学院で修士論文執筆に向けた研究活動に取り組み、研究に対する認識を深めるためには、(1) 研究環境のデザイン、(2) ロールモデルの必要性、(3) 他者・自己・研究との対話、の3つの要素が重要であることを指摘した。

このように、本研究において、日本語専攻生の大学院進学および大学院における研究観の形成と変容、また、研究活動の参加プロセスを可視化したことは、留学生指導に示唆を与えるものである。

今後の課題として、(1) 専門分野別に、日本語学習者と大学院留学生の研究意識の特徴を洗い出すこと、(2) 日本人学生やほかの国の留学生にも着目し、中国人留学生の研究観との共通点・相違点を検証すること、(3) ゼミにおける研究活動において、留学生と他者の相互作用に光を当て、研究観の形成との関連について、事例を収集することの3点がある。上述の課題を踏まえ、大学院における研究観の形成およびその変容に関する事例を増やし、他者との相互作用にも注目しながら質的な分析を進め、研究の精度を高めていきたい。